

毎月1回20日発行

(昭和31年3月28日第3種郵便物認可)

山と博物館

NO.22

1957年10月20日

編集
発行

大町山岳博物館



道祖神 (どうそじん)

長野県大町市三日町来見(けみ)原



大町市三日町の道祖神



八坂村切久保の道祖神



白馬村細野の馬頭観世音



大町市常盤区清水の庚申塔

石神石仏 (せきしんせきぶつ)

—道祖神・庚申さま・大黒さま—

この安曇(あすみ)地方を訪れたみなさんは、村々のつじや広場や社寺の境内、それに村の入口などに建てられてあるたくさんの石神石仏に気づかれるでしょう。これらの碑(ひ)は、もちろん、この地方だけのものではありませんが、数や種類の多いことは他に見られない特色です。

むかし、これらの石神石仏がどんなゆかりで建てられたかを調べてみるのも、大変興味深いものです。また、これをめぐっているいろいろの集団がつけられていましたが、その集団が村落生活に大きな影響を与えていたことも、うかがえます。それは村落生活の一端をになっていたものでした。

その種類をあげますと道祖神(どうそじん) 甲子講(きのえねこう)の大黒天(だいこくてん)、蚕玉(さんぎょく)神の石神系のもので庚申講(こうしんこう)の庚申塔、月待(つきまち)の二十三夜塔、馬頭観世音(ばとうかんのん)、廻国供養塔(かいこくくようとう)、納経(のうきょう)供養塔、念物供養塔の石仏系の二つの種類があります。また文字をきざんだ文字碑と神体仏体をきざんだ彫刻の碑にもわけられます。まずしい技術でも、全精神をうちこんでつくられたすばらしい作品もたくさんあり、そのユーモラスなすがたは田舎の特徴でもあります。

ではこの石神石仏類はどのようなところにたてられるのでしょうか。道祖神、蚕玉神は石の祠堂(しどう)のものがたくさんあり、道祖神、庚申塔、二十三夜塔、大黒天碑などはよく道ばたに見られますが、この場所は村の中央の広場やつじ、あるいは、村はずれなどの大切な場所であり、村の霊地ともいえる神聖なところなのです。石仏類は仏に關係があるのでお寺やお堂、墓などにもたくさんあり、馬頭観世音は個人が馬の供養のために家の近くや墓、道ばたにちらばっています。

この碑をたてた年代は江戸時代のもので全部ですが、しかし元禄(げんろく)以前のもは少なく、多くのは寛政(かんせい)から文化、文政、天保(てんぽ)、嘉永(かえい)、安政、万延(まんえん)、文久、慶応(けいおう)というように江戸の終り頃のものが多くなっています。新しいものでは明治、大正から昭和の初め頃のものもあります。庚申塔は60年に一度、おとずれる庚申年にたてられたものがおもであります。たてた人は分水(ぶんぜ)中、大笹(おおざさ)中、北原(きたばら)中、などとよばれる部落の小さな集団でほとんどたてました。とくに庚申塔は庚申講中、大黒天は甲子講中でたてられています。



大町市大黒町の大黒天



大町市高根町の石神石仏



池田町会染区の石神石仏

道祖神 道陰(どうろく)神、才(さい)の神、塞(さえ)の神、道の神ともいわれます。この道祖神については猿田彦命(ざるたひこのみこと)にこちつけた説などがいろいろありますが、陰陽二人の男と女たちの縁(えん)結びの神の性格や、また子供たちの遠足、運動会の日に晴れることをいのって、なわで道祖神をしぼるというようなこともありました。村ざかい、峠、橋のたもとなどが

らくまややく病が村へ入らないように防ぐための神でもありました。そのほか、おんべ焼との関係や、そのうらには「帯代何岡」と書かれ、他の村からものをうばう風習もありました。正月に使うやすでつくった小屋にすわっている道祖神も北安曇にはたくさんあります。

庚申塔 おこうしんさま、こうしんさま、おかのえさまなどとも呼ばれ、青面金剛(せいめんこんげう)、大青面金剛の六臂(むひ)とそのはげしい形相がきざまれています。昔から作神様として、農作、養蚕の神であり、土地をまもる神、ときには勤労の神でもありました。60日に一度の庚申日に祭りをします。私たちの村では庚申講を組織して、葬(そう)式、婚礼の時にお互いがいに助けあっています。

二十三夜塔 庚申講の講員が寄り合って、酒食を一緒にし、旧23日の月待をします。また一説に勢至菩薩(せいしぼさつ)をいのるものだともいわれます

大黒天 円満、にこやかな福の神であると同時に、五穀(ごこく)豊穰(ほうじょう)養蚕、繁昌(はんじょう)をいのる農作の神であります。えびすさま、だいくさまと対称にして、田の神としてもまつります。いずれにしても金銀たくさんをいのる福の神としての性格がもっとも強く現われています。この地方では甲子講を組織し、つじつじの大黒天をまつり、60日に一度の甲子の日に頭屋(とうや)に寄り合い、稲作りや畑作のできばえを話しあい、世間の話に花をさかせ、一夜をたのしみます。この付近の大黒天はおもに幕末から明治、大正時代にたてられました。

(長野県大町南高等学校 青木治)

長野県のサギ

長野県下に分布するサギ類はたいへん少なく、はんしょく鳥としてはアオサギ、ゴイサギ、チュウサギ、ヨシゴイ、ササゴイくらいのものであり、このうちゴイサギは留鳥、アオサギは漂鳥で、そうほかはすべて夏鳥です。このほかにもチュウダイサギ、ダイサギ、アマサギ、ムラサキサギなどが旅鳥、または迷鳥として春秋の渡りの時期を中心に、ごくわずか見られるだけです

はんしょく鳥のうち、全県下に分布するものはゴイサギ、ヨシゴイ、ササゴイであり、アオサギ、チュウサギは下伊那、下水内の両郡下に部分的に集団で巣をつくっています。サギ類は暖帯に生活するのが本体ですから、山国でしかも温帯という長野県下には安心してすめるところが少いでしょう。しかし、動物の分布はその食物に大きく影響されるので、気温の低い諏訪地方にも夏鳥としてのチュウサギが見られます。諏訪大社の境内にチュウサギが例外的にすんでいるのも、諏訪湖の豊富な魚介類を目標にしているわけです。

写真はいずれも新潟県下にはんしょくしたチュウサギが、初秋のころに南下をはじめ、一時のねぐらを善光寺平の千曲川畔のアシ原に求め、えさを見つけに飛んでいるところです。(信州大学教育学部 羽田健三)

留鳥：一年中を通じて同地方にとどまるもので、カラス、スズメなど。**漂鳥**：国内で雪が降ればあたたかい地方に行って越冬するもので、ムクドリなど
夏鳥：夏日本ではんしょくし、秋になると南の方へ移り、冬を越してふたたび日本へ渡ってくるもので、カツコウ、ホトトギスなど。**旅鳥**：日本ではんしょくも越冬もしないで、北の方のはんしょく地から南の越冬地に渡る途中、一時日本に姿をあらわすものでノゴマ、ムギマキなど。**冬鳥**：日本から北方の地ではんしょくし、秋に日本へ渡り、冬を越すと翌春ふたたびもとの北方地方へ帰ってゆくもので、カモ、マヒワなど。**迷鳥**：渡りの途中でいろいろの原因から日本へ迷ってくるもので、信州ではオオミズナギドリなど。



秋の文化祭開く

市公民館主催の第2回市民文化祭は、11月1日から5日まで市内4会場で幕をあげます。第3会場の山岳博物館では各国の南極観測隊資料を公開するほか、博物館染色グループの作品展示会や、市民写真展なども開かれることになりました。また同好会音楽サークルは10日の市民合唱祭に参加し、「山の歌」を発表します。

11月1日 移転開館式

＝博物館を建設して満6年＝

この8月新館に移転開館した博物館開館式が、11月1日午前10時から本館で行われます。当日は大町に博物館ができてから満6年目にあたりますが、関係者が集って6年間の懐古やこれからの構想などが話し合いされます。山岳博物館ができたのは昭和26年11月1日で当時は貧弱な施設と内容をもって発足したのですが、5年の間にようやくその価値も認められるようになり、昨年は建設当時予定した現位置に新館が完成し、ことしになって移転拡大されたものです。市教育委員会の三沢教育長は次のように語っています。「恵まれた環境に育った山博も、ことしから大人の世界にはいったようです。まだまだ施設や資料が整いませんが、これからは博物館のもつ実力がすべてを方向づけることとなります。大いに頑張らなければなりません。山博に対する暖かい力添えをお願いします。」

郷土の民芸品

やき木ぼっこ

やき木ぼっこ人形は私たち祖先が山の奥深く狩や伐材に行きついで焚き火を囲み手すざびに、やき木で作ったことがはじまりだと伝えられている。祖先の人々の天心らんまんな素朴さがやき木ぼっこに現われ、ほのぼのとした表情がうかがえる。



【博物館だより】9月19日同好会だより発行 21～22日博物館のつどい 23日同好会染色の会 28～29日博物館のつどい 30日山の歌声 10月3日大町市公民館山岳博物館合同協議会 5～6日博物館のつどい 染色の会 8日博物館学習室 9日少年野外教室 13日博物館のつどい 15日山の文学座談会講師深田久弥氏 16日山の歌声 20日博物館のつどい ハイキング高瀬渓谷不動沢方面

(今月の寄贈) ノスリ1体大町市野口新屋福島紘宇 オオアカゲラ1体大町市神楽町佐藤壽男 ノスリ1体北安松川村中村寺島亀三 オオタカ1体大町市木崎遠藤直澄 アカシヨウビン1体北安美麻村大塩中の具藤井ただとし (敬称略)

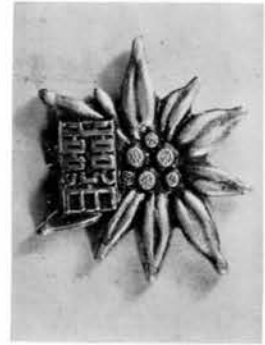
お願い 本紙の購読御希望の方は1年分購読料170円(郵送料共)を現金書留または郵便為替、郵便切手で御送り下さい。 大町山岳博物館

山岳会 17

東京慈恵会医科大学山岳部
東京都港区芝愛宕町

大正14年山岳同好の志が集まって設立、昭和3年学生会公認の山岳部となる。現在部員は28人中女子が6人。昨年の活動状況をあげて見ると5月上旬新人強化合宿、7月下旬—8月上旬にかけて剣、槍、瀧沢の夏山合宿、3月下旬弥陀原において春山合宿、さらにOBを含めた總會を春秋各一回づつ開いている。

バッヂはエーデルワイスに慈大を配したものだ。



新たにかもしか入園

皆さんで名前をつけて下さい

10月18日中房温泉でいままで保護していた「かもしか」が山博の付属動物園にはいりました。生れは1955年のメスですから、今飼育中の「岳子」と同級生になりました。色は岳子さんとちがって黒褐色です。岳子さんとは別居していますが、来年からは広い飼育施設ができますので、のびのびした勇姿がごらんになれるでしょう。博物館では今、この新しくはいった「かもしか」の名前を皆さんからつけていただくために、次の要項で名前を募集しています。皆さんでよい名前をつけてやって下さい。

▲生れは北アルプス中房国有林です。

▲官製はがきで11月15日までに長野県大町市 大町山岳博物館あてに送って下さい。

▲入賞された方には薄謝をさしあげます。

××× 後記にかえて ×××

▼「山と博物館はむずかしい」という批判がだされるようになった対象をどこにおくか、ということが編集者の悩みのようだが、一般に博物館そのものが固く、むずかしい感じを与えているのも事実である。▼ことしの全国博物館週間(10月6日～12日)では、国民大衆の教養とレクリエーションの場としての博物館が強調された。博物館の教育活動が大衆の生活に結びつくために、ということもよくいわれている。ところが、この生活に結びつけるためにはどうするかという研究が、まだ未開拓だという気もする。▼わが国では民衆が大学にはいることはできないが、大学を民衆の中におくことはできる。博物館も進んで大衆の中にはいるだけの心がまえがないと、「結びつく」ことは単なる歌い文句になりかねない。▼日本では博物館が少なすぎる。それほど博物館は必要でないとは思わなくても、この辺で博物館そのものが地域社会で育たない理由を考えなくてはなるまい。近ごろいわれるようになった「地域博物館」に徹するための努力をしないと、博物館が社会一般の理解と協力を深めることはむずかしいだろう。▼山と博物館も、こんな反省の上になって、もうひとふんばりも、ふたふんばりも頑張りたいと思っている。(内山記)

山と博物館 No.22 1957.10.20発行
発行所 大町山岳博物館
長野県大町市神楽町電話211番
印刷所 信州印刷株式会社